

Remote Sensor Project

S.Matoike

2024 年 5 月 12 日

目次

1	全体の構成	3
2	リモートマシン	4
2.1	リモート機器、センサー	4
2.2	リモート処理の概要	5
3	ローカルマシン	7
3.1	ローカル機器	7
3.2	cron による時刻指定の処理	8
3.3	リモートセンサの処理をローカルマシンから起動する	9
3.4	日毎の処理	10
3.5	日毎処理のプログラム	11
3.6	グラフ描画のための関数	12
3.7	週毎の処理	14
3.8	週毎処理のプログラム	14
3.9	測定データのグラフを実時間で描画する	17
4	リモートマシン単独での運用	22
4.1	リモートマシンでの処理	22
4.2	ローカルマシンでの処理	24
5	新たなシステムへの移行手順	27
5.1	ローカルマシンの移行	27
5.2	リモートマシンの移行	29
6	参考文献	30

1 全体の構成

[192.168.3.27]



リモートマシン
Raspberry Pi Zero WH
ゼロ・ワン臭気センサ



[192.168.3.21]



ローカルマシン
Raspberry Pi 3, 4 or 5
US キーボード、マウス (USB)
モニタ (HDMI)

図 1 システム全体の構成

- 5 分毎にリモートマシン上の臭気センサの測定データをローカルマシンに読み取る
- 読み取った 5 分毎のデータは、追記、蓄積していくと同時に、実時間の臭気変化としてグラフを描画更新する（ローカルマシン上）
- 23 時 56 分に、日毎の処理を起動し、1 日分の蓄積データをグラフ化すると共に、蓄積した 1 日分のデータは別フォルダに退避する（ローカルマシン上）
- 日曜日の 0 時 1 分に、週毎の処理を起動し、その日から過去 1 週間分の蓄積データを読んでグラフ化する（ローカルマシン上）

2 リモートマシン

2.1 リモート機器、センサー

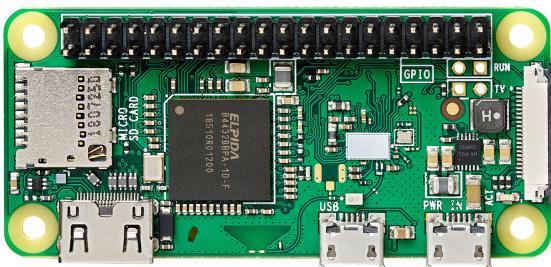


図 2 Raspberry Pi Zero WH

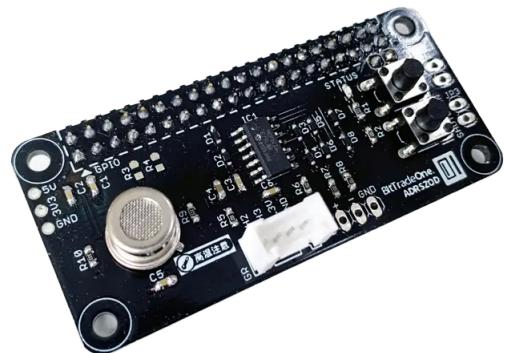


図 3 ADRSZOD:TP401A

臭気センサ TP-401A

- 低電力で動作可能な高感度の臭気センサ
- コンパクトな Raspberry Pi Zero と重ねて使用可能な pHAT サイズ
- アンモニア、水素、アルコール、一酸化炭素、メタンなど揮発性気体、タバコ、木材燃焼発生した煙など様々な気体に対応
- 連続通電を許容するので、様々な所での継続的なチェックが可能（動作時にはセンサ部が非常に高温となるため、取り扱いには注意）
- 動作状況が見えるステータス LED により、駆動状況の確認が容易

運用方針

- 基本的な運用形態は、モニタ、キーボード等を接続せず電源のみの接続で運用する
- このマシン上では、数行の shell を登録するだけなので、基本的には他の PC のコンソールから ssh で login して利用する（この例では、ユーザは mat）

`ssh mat@192.168.3.27`

- VNC を有効にして他の PC からアクセスすれば、デスクトップも利用できる

2.2 リモート処理の概要

Raspberri Pi Zero WH 上に用意したこの shell (sensor.sh) は、別の RaspberryPi マシンから ssh によって起動される

i2c で接続された臭気センサの出力（電圧値）は、Python のプログラム (adrszOD.py) によって読み取られる

adrszOD.py は ch1 から ch4 までの値を出力しているので、その出力を awk にパイプして、1 つ目の ch1 の値だけを取り出している

date コマンドで作成している測定日付は、後ほど Python の matplotlib の都合に合わせて、新たにデータの整形処理が必要にならない様に、書式を「年 - 月 - 日と時 : 分 : 秒の間は、半角カンマ + 半角スペース 1 個」の格好になる様に整形している

日付とセンサの出力する値が 1 行になる様にするため、paste コマンド（テキストファイルを横に並べて結合するコマンド）を使っている^{*1}

paste の 2 つのオペランド、<(date +....) と、<(python3 ..procmain.py..) の各々のコマンドは、<(any command) の形に囲むことにより、読み取りのためのファイル記述子を指定したことになり、それぞれを 2 つのファイルの様に扱うことができる^{*1}

```
/home/mat/Documents/sensor.sh
#!/usr/bin/bash
dir='/home/mat/Documents'
paste <(date +%Y-%m-%d,\ %H:%M:%S) \
<(python3 ${dir}/procmain.py | awk '{print $1}')
```

この shell を起動してみると、次の通り

sensor.sh の出力例

```
mat@raspberrypizero:~/Documents $ ./sensor.sh
2024-04-17, 02:40:55 ch1:0.79827
mat@raspberrypizero:~/Documents $
```

以下は、センサーを読むための Python プログラムのソース（臭気センサ拡張基板のメーカーが提供しているプログラム^{*1}を書き変えて使っている）である

^{*1} 「Efficient Linux コマンドライン」 オライリー・ジャパン 初版第 1 刷 p.108、p.156（プロセス置換）

^{*1} <https://github.com/bit-trade-one/RasPi-Zero-One-Series>

```

/home/mat/Documents/adrszOD.py ━━━━━━━━

import smbus
import time

class I2C:
    i2c_bus = None
    def __init__(self, bus_number=1):
        cls = type(self)      # 旧スタイルなら、cls = self.__class__
        cls.i2c_bus = smbus.SMBus(bus_number)

class TP401A(I2C):
    def __init__(self, address=0x68, Vref=2.048) -> None:
        super().__init__(bus_number=1)
        self.address = address
        self.Vref = Vref

    def swap16(self, x):
        return (((x << 8) & 0xFF00) | ((x >> 8) & 0x00FF))

    def sign16(self, x):
        return (-(x & 0b1000000000000000) | (x & 0b0111111111111111))

    def read_val(self, x):
        self.i2c_bus.write_byte(self.address, x) #16bit
        time.sleep(0.2)
        data = self.i2c_bus.read_word_data(self.address, 0x00)
        raw = self.swap16(int(hex(data),16))
        raw_s = self.sign16(int(hex(raw),16))
        volts = round((self.Vref * raw_s / 32767),5)
        return volts

```

クラス TP401A が、クラス I2C を継承する様にしたのは、新たな別の I2C 対応デバイスを、同じバス上に接続する場合を想定したもの

TP401A クラスは I2C クラスを継承しているので、TP401A のコンストラクタの中で I2C クラスのコンストラクタを明示的に実行し、I2C バスの番号を指定している

TP401A クラスの上位クラス I2C クラスのクラス変数 i2c_bus へのアクセスは、「self. 変数名」の格好でアクセスすることによって、インスタンス変数→クラス変数→親クラスのクラス変数の順に探索され、I2C クラスのクラス変数にたどり着けることになる

この TP401A クラスを使う主処理は、sensor.sh の中から呼び出されている

```
/home/mat/Documents/procmain.py
```

```
#!/usr/bin/env python
from sarz0D import TP401A

if __name__ == "__main__":
    smel = TP401A()
    volts1 = smel.read_val( 0b10011000 )
    volts2 = smel.read_val( 0b10111000 )
    volts3 = smel.read_val( 0b11011000 )
    volts4 = smel.read_val( 0b11111000 )
    out_msg = f"ch1:{volts1} ,ch2:{volts2},ch3:{volts3},ch4:{volts4}"
    print(out_msg)
```

3 口一カルマシン

3.1 口一カル機器



図 4 Raspberry Pi 3, 4 or 5

3.2 cron による時刻指定の処理

cron の仕組みを使う（3つの時刻指定の処理を登録している）

- (1) 5 分ごとに、リモートセンサの値を読み取る処理、rsensor.sh を起動する
- (2) 毎日 23 時 56 分になったら、その日 1 日分の測定データを退避する処理、daily.sh を起動する
- (3) 毎週日曜日の朝 0 時 1 分になったら、先週 1 週間の（先週の日曜日の 0 時 0 分から昨日の土曜日の 23 時 55 分まで 5 分間隔で測定した）測定データをまとめる処理、weekly.sh を起動する

```
crontab -e
MAILTO=""
*/5 * * * * sh /home/mat/Documents/rsensor.sh
56 23 * * * sh /home/mat/Documents/daily.sh
1 0 * * Sun sh /home/mat/Documents/weekly.sh
```

ここで、MAILTO="" としているのは、「指定時刻に cron が処理を起動したよ」というメールを送信するために smtp を起動しようとして失敗し、指定の処理が起動されないという現象に対する対応である^{*2}

```
+----- minute (0 - 59)
| +----- hour (0 - 23)
| | +----- day of month (1 - 31)
| | | +----- month (1 - 12)
| | | | +--- day of week (0 - 6) (Sunday=0 or 7)
| | | | |
* * * * * command to be executed
```

^{*2} postfix や sendmail など、SMTP の何某かをインストールせよという説もあるが、特にメールの知らせが不要ならこのやり方が最も簡易な解決方法になる

3.3 リモートセンサの処理をローカルマシンから起動する

リモート（192.168.3.27）の Raspberry Pi Zero WH に接続されている臭気センサの値を読みとる shell（sensor.sh）を、ローカル（192.168.3.21）のマシン Raspberry Pi から ssh を使って起動するための shell（rsensor.sh）であり、cron によって 5 分ごとに起動される

この時 ssh から、リモートマシン（Pi Zero）のユーザ（今の環境では mat）のパスワードを要求されるが、人手によるインタラクティブな入力操作を想定していないので、予め sshpass を導入しておいて、それによってパスワードを自動応答させる様にしている

ssh でリモートの shell を実行した結果を受け取り、ローカルの w.txt に追記し蓄積している

```
/home/mat/Documents/rsensor.sh
#!/usr/bin/bash
### sudo apt install -y sshpass ###
dir='/home/mat/Documents'
addr='192.168.3.27'
usr='mat'
pass='mypassword'
sshpass -p ${pass} ssh ${usr}@${addr} \
${dir}/sensor.sh >> ${dir}/w.txt
```

w.txt の様子は、tail -f w.txt などとしてみると、5 分ごとに起動された shell（rsensor.sh）によって、測定結果が蓄積されていく様子がわかる（このファイルは、1 日の終わりの処理で 2024-04-16.txt の様に、日付をつけたファイル名に変えて保存している）

```
w.txt -> 2024-04-16.txt
2024-04-16, 00:35:04 ch1:1.0896
2024-04-16, 00:40:04 ch1:1.09016
2024-04-16, 00:45:04 ch1:1.09322
.... ...
2024-04-16, 23:45:04 ch1:0.9059
2024-04-16, 23:50:04 ch1:0.99653
2024-04-16, 23:55:04 ch1:0.98809
```

3.4 日毎の処理

毎日の 23 時 55 分に、その日の最後の測定が終わる事を前提として、cron には 23 時 56 分になったら次の shell (daily.sh) を起動する様にしている

この shell では、現在時刻が 23 時 55 分を超えていることを確認した上で、次のことを行っている

- 蓄積された 1 日分の測定データ w.txt を、bkup.txt という名前のファイルにコピーしている
- w.txt を、data フォルダ以下に、「今日の日付.txt」 という名前に変更して保存している
- 空のファイル w.txt を次の日の測定データの蓄積場所のために用意している (touch)
- Python の仮想環境 venv11 に入って、daily.py を起動している（第 1 引数に data フォルダ以下に保存した測定データファイルの名前=年月日を指定している）
- プログラムの実行を終えたら、Python の仮想環境 venv11 から抜けている

```
/home/mat/Documents/daily.sh ━━━━━━━━  
#!/usr/bin/bash  
dir='/home/mat/Documents'  
dates=$(date +%Y-%m-%d)  
hour=$(date +%H)  
minu=$(date +%M)  
if [ ${hour} -ge 23 ]; then  
    if [ ${minu} -gt 55 ]; then  
        cp ${dir}/w.txt ${dir}/bkup.txt  
        mv ${dir}/w.txt ${dir}/data/${dates}.txt  
        touch ${dir}/w.txt  
        source ${dir}/venv11/bin/activate  
        python3 ${dir}/daily.py ${dates}  
        deactivate  
    fi  
fi
```

3.5 日毎処理のプログラム

myplot.py から、graph_plot() 関数を import している（この関数の詳細は後述）

第 1 引数に指定があったら、そこで指定された日付のデータを元に、グラフを描画できる様にしている

指定のデータファイルを開いて、最初の 20 文字までは、予め matplotlib の dates に対応した様式の日付文字列にしているので、それを Unix の日付けに変換している

25 文字目以降は、測定した電圧の値だが、改行文字が付いていたりするので、.strip() によってホワイトスペースを除去して、実数に変換している

日付と電圧のリストを作って、それを graph_plot() 関数に渡して作図させている

```
/home/mat/Documents/daily.py —
```

```
import sys
from datetime import datetime as dt
import matplotlib.dates as mdates
from myplot import graph_plot

dirstr = '/home/mat/Documents'
today = dt.now().strftime('%Y-%m-%d')
if len(sys.argv) > 1:
    today = sys.argv[1]

list0=[]
with open(dirstr + "/data/" + today + ".txt") as f:
    for line in f:
        datestr = line[:20].strip()
        datev = mdates.datestr2num(datestr)
        value = float(line[25:].strip())
        list0.append([datev, value])

graph_plot(list0, dirstr, today, False)
```

この Python のプログラムを実行した結果として、次の様な 1 日分のデータの変化をグラフ化したものが得られる（これは `figs` フォルダ以下に 「今日の日付.png」 という名称で保存している）



図 5 daily.py の出力 (4月 16 日の 0 時から 24 時まで)

3.6 グラフ描画のための関数

`daily.py` と `weekly.py` で共通に呼び出している `graph_plot()` 関数を、以下の様に定義している

横軸に日付と時刻（データは 5 分毎）を置くため、少し工夫が必要になる

ポイントは、`matplotlib` が理解する日付の様式で書いたものを使うことさえできれば、`matplotlib` の `dates` に、`locator` と `formatter` を自動生成させ、それ以下の全ての面倒な処理を任せきりができる^{*3} 点にある

^{*3} https://matplotlib.org/stable/api/dates_api.html の記事が参考になる

```

/home/mat/Documents/myplot.py

import numpy as np, pandas as pd
from matplotlib import pyplot as plt, style, dates as mdates

def graph_plot(list0, dirstr, datestr, weekly=False):
    df = pd.DataFrame(list0, columns=["DateVal", "Value"])
    matplotlib.style.use('ggplot')
    fig, ax = plt.subplots()
    x = df.loc[:, "DateVal"].values
    y = df.loc[:, "Value"].values
    locator = mdates.AutoDateLocator()
    formatter = mdates.ConciseDateFormatter(locator)
    ax.xaxis.set_major_locator(locator)
    ax.xaxis.set_major_formatter(formatter)
    ymin, ymax = y.min(), y.max()
    step = (ymax - ymin) / 10.0
    ymax = ((ymax // step) + 1) * step + step/2.0
    ymin = (ymin // step) * step - step/2.0
    ax.set_ylim([ymin, ymax])
    ax.set_xlabel('Date-Time')
    ax.set_ylabel('Volt')
    if weekly:
        titlestr = "Smel Level : " + datestr + "(Weekly)"
        figpath = dirstr + "/figs/" + "Weekly_" + datestr
    else:
        titlestr = "Smel Level : " + datestr
        figpath = dirstr + "/figs/" + datestr
    ax.set_title(titlestr)
    ax.plot(x,y)
    fig.savefig(figpath + '.png')
    plt.show()

```

3.7 週毎の処理

この処理は cron によって、毎週日曜日の朝 0 時 1 分に起動される

この shell (weekly.sh) では、0 時 0 分より後の時刻ならば仮想環境 venv11 に移って、Python のプログラム (weekly.py) を起動し、終わったら仮想環境から抜けている

Python のプログラムは、第 1 引数に日付を受け取ることができる様にしている

/home/mat/Documents/weekly.sh

```
#!/usr/bin/bash
dir='/home/mat/Documents'
dates=$(date +%Y-%m-%d)
hour=$(date +%H)
minu=$(date +%M)
if [ ${hour} -ge 0 ]; then
    if [ ${minu} -gt 0 ]; then
        source ${dir}/venv11/bin/activate
        python3 ${dir}/weekly.py ${dates}
        deactivate
    fi
fi
```

3.8 週毎処理のプログラム

myplot.py から graph_plot() 関数を import している

第 1 引数で処理対象にする最終日付を受け取ることができる様にしている

指定された処理対象の最終日付から、7 日前の日付を求めて、7 日間の日付のリスト datelist を作っている

7 日間の日付リスト datelist から 1 日ずつ取り出しては、そのファイル名のデータを data フォルダから読み出し、日付の変換と電圧の実数への変換を行い、それらのデータのリストを list0 に追記していっている

もし、指定した日付のデータファイルがなかった場合は、例外処理で受けて黙って次の日付のファイルのデータ取得に移る様にしている

graph_plot() 関数に list0 を渡してグラフの作図をさせている

```

/home/mat/Documents/weekly.py

from datetime import datetime as dt, timedelta
import sys, matplotlib.dates as mdates
from myplot import graph_plot

dirstr = '/home/mat/Documents'
s_format = '%Y-%m-%d'
today = dt.now()
if len(sys.argv) > 1:
    today = dt.strptime(sys.argv[1], s_format)
startstr = (today - timedelta(days=7)).strftime(s_format)

datelist = []
for i in range(7):
    day = today - timedelta(days=(7-i))
    datelist.append(day.strftime(s_format))

list0=[]
for fname in datelist:
    try:
        with open(dirstr + "/data/" + fname + ".txt") as f:
            for line in f:
                datestr = line[:20].strip()
                datev = mdates.datestr2num(datestr)
                value = float(line[25:].strip())
                list0.append([datev, value])
    except FileNotFoundError:
        continue

graph_plot(list0, dirstr, startstr, True)

```

以下は、週毎処理が output する画像である。4月 21 日（日曜日）の 0 時 1 分に cron によって起動され実行されたものだが、フォルダ data の中には、測定を始めた 4月 16 日（火曜日）から、4月 20 日（土曜日）までの 5 日分のファイルがあるだけである。本来なら 1 週間前の日曜日（4月 14 日）のデータから週毎処理の対象となるところだが、プログラムの中では FileNotFoundError の例外を捕捉して、とにかく continue によって処理を継続させているため、何事もなかったかの様に、データファイルの所在する火曜日以降がグラフに作図されている

また、日毎処理のプログラム daily.py と全く同じグラフ作図の関数（myplot.py の中の graph_plot() 関数）を使っているのだが、横軸の設定が matplotlib の dates (mdates としてプログラム中では使っている) によって、自動的に調整されているのが分かる（便利）



図 6 weekly.py の出力

3.9 測定データのグラフを実時間で描画する

RTPlot クラスに必要な関数類をまとめたものである

ポイントとなるのは、 plt.show() を使わず、 plt.pause(1.0) を使うこと、 tail -f をプログラム上で実現することの 2 点である

self.x と self.y のリストに順にデータを追記していく、新たなデータが w.txt に追加されたタイミングで plt.pause(1.0) としている（引数の値を 0.1 や 0.01 にすると Raspberry Pi では全て描画しきれないので注意）

tail_f() 関数は、コマンド tail -f w.txt を Python のプログラムで実現したもの（指定したファイルの最終行が追記されるまで continue で待っている）である

```
import sys, time, numpy as np
from matplotlib import style, pyplot as plt, dates as mdates
from datetime import datetime as dt, timedelta

class RTPlot:

    def dateproc(self):
        #s_format = '%Y-%m-%d, %H:%M:%S'
        s_format0 = '%Y-%m-%d, 00:00:00'
        today = dt.now()
        tomor = today + timedelta(days=1)
        self.todaystr = today.strftime(s_format0)
        self.tomorstr = tomor.strftime(s_format0)

    def readdata(self, fname):
        try:
            with open(fname, 'r') as f:
                for line in f:
                    self.chop(line)
        except FileNotFoundError:
            print(f'File{fname} not found')
```

```

def __init__(self, fname):
    self.fname = fname
    self.x = []
    self.y = []
    self.ims = []
    self.dateproc()
    self.readdata(fname)
    matplotlib.style.use('ggplot')
    self.fig, self.ax = plt.subplots()
    locator = mdates.AutoDateLocator()
    formatter = mdates.ConciseDateFormatter(locator)
    self.ax.xaxis.set_major_locator(locator)
    self.ax.xaxis.set_major_formatter(formatter)
    xmin = mdates.datestr2num(self.todaystr)
    xmax = mdates.datestr2num(self.tomorstr)
    self.ax.set_xlim([xmin, xmax])
    self.yrange()
    self.ax.set_xlabel('Date-Time')
    self.ax.set_ylabel('Volt')
    self.update()

def chop(self, line):
    datestr = line[:20].strip()
    datev = mdates.datestr2num(datestr)
    value = float(line[25:].strip())
    self.x.append(datev)
    self.y.append(value)

def statvalue(self):
    self.ymax = np.array(self.y).max()
    self.ymin = np.array(self.y).min()
    self.mean = np.array(self.y).mean()
    str1 = f"Max={self.ymax:.2f}, Min={self.ymin:.2f}, "

```

```

str2 = f"Mean={self.mean:.2f}"
self.ax.set_title("Smel Level : " + str1 + str2)

def tail_f(self):
    try:
        with open(self.fname, 'r') as f:
            f.seek(0, 2)
            enter = dt.now()
            while True:
                line = f.readline()
                if not line:
                    time.sleep(1)
                    if dt.now() - enter < timedelta(minutes=6):
                        continue
                return
            return line.strip()
    except FileNotFoundError:
        print(f'File{self.fname} not found')
    return

def yrange(self):
    self.statvalue()
    step = (self.ymax - self.ymin)/10.0
    v = 0
    while self.ymax > v:
        v += step
    ymax = v + step/2.0
    while self.ymin < v:
        v -= step
    ymin = v - step/2.0
    self.ax.set_ylim([ymin, ymax])

```

```

def update(self):
    self.yrange()
    if len(self ims) > 0:
        im = self ims.pop()
        im.remove()
        im, = self.ax.plot(self.x, self.y, color='red')
        self ims.append(im)

if __name__ == "__main__":
    dirstr = '/home/mat/Documents'
    fname = dirstr + '/w.txt'
    if len(sys.argv) > 1:
        fname = dirstr + '/' + sys.argv[1]
    rtp = RTPlot(fname)
    tomorrow = dt.strptime(rtp.tomorstr, '%Y-%m-%d, 00:00:00')
    while dt.now() < tomorrow:
        plt.pause(1)
        line = rtp.tail_f()
        if line is not None:
            print("[info.log]", line)
            rtp.chop(line)
            rtp.update()
    rtp.fig.savefig(dirstr + '/figs/R_' + rtp.todaystr[:10] + '.png')

```

tail_f() 関数の中では、6 分を超えて continue を繰り返している場合に None を返す事にしている（6 分待てば、その間には必ず 5 分間隔のイベントは入ってくると思う）ので、main の中の繰り返し処理 while の中でその事を（PEP8 が可読性の観点から推奨している書き方）is not None によって判定している

実時間処理の画面は次の様になる。

このプログラム rtplot.py が終了時に保存する画像は、実は毎日処理のプログラム daily.py が出力するものとほぼ同じ傾向を示しているはずだ。ただ rtplot.py の方は、新たな点をプロットするたびに y 軸の最大値と最小値を更新しているため、毎日の処理では作図の範囲外に出るデータも示せているし、また具体的な最大値、最小値、平均値の値もそ

の都度更新して表示している



図 7 実時間出力（途中経過：5月2日の20時過ぎ）

この実時間プロットのプログラムを起動する shell を、実行可能属性を持たせてデスクトップに置いている（マウスのクリックで起動できる）

```
/home/mat/Desktop/rtplot.sh —————  
#!/usr/bin/bash  
dir='/home/mat/Documents'  
cd ${dir}  
source ${dir}/venv11/bin/activate  
python3 ${dir}/rtplot.py  
deactivate
```

4 リモートマシン単独での運用

リモートとローカルの両方を動かし続けるのが難しい場合に、普段はリモートだけでデータを集めておいて、時々ローカルにリモートのデータを取り込み、それをグラフ化するなどの処理を行う方法をとる運用も考えられる

4.1 リモートマシンでの処理

リモートのコンピュータ内でデータを集める仕組みは、ほぼローカルコンピュータでの処理と同様にして実施する

```
/home/mat/Desktop/proc.sh
#!/usr/bin/sh
dir='/home/mat/Documents'
${dir}/sensor.sh >> ${dir}/w.txt
```

リモートにも、(ローカルと同様のディレクトリ構成で) /home/mat/Documents/data を用意しておく

```
/home/mat/Desktop/procdaily.sh
#!/usr/bin/sh
dir='/home/mat/Documents'
dates=$(date +%Y-%m-%d)
hour=$(date +%H)
minu=$(date +%M)
if [ ${hour} -ge 23 ]; then
  if [ ${minu} -gt 55 ]; then
    cp ${dir}/w.txt ${dir}/bkup.txt
    mv ${dir}/w.txt ${dir}/data/${dates}.txt
    touch ${dir}/w.txt
  fi
fi
```

crontab では、5 分ごとの処理を（ローカルマシンの処理時刻とずらすため）、3,8,13,18,... の 5 分おきに実行される様にした

```
crontab -e
MAILTO=""

# m h dom mon dow   command
3-58/5 * * * * sh /home/mat/Documents/proc.sh
56 23 * * * sh /home/mat/Documents/procdaily.sh
```

4.2 ローカルマシンでの処理

Python のプログラムで、ローカルマシン内に欠けている日付のデータファイルを調べる
/home/mat/Documents/lackdata.py

```
from datetime import datetime as dt, timedelta
import glob

s_format = '%Y-%m-%d'
todaystr = (dt.now() + timedelta(days=0)).strftime(s_format)
today = dt.strptime(todaystr, s_format)

dirstr = '/home/mat/Documents'
wlist = glob.glob(dirstr + '/data/*.txt')
dlist = []
for w in wlist:
    dlist.append(dt.strptime(w[len(dirstr)+6:-4], s_format))
dlist.sort(reverse=True) # descending order

ten_days = 10
lacklist = []
for d in range(ten_days):
    day = today - timedelta(days=d)
    if day in dlist:
        continue
    else:
        lacklist.append(day)

for fname in lacklist:
    print(fname.strftime(s_format))
```

Python のプログラムを実行した段階で、ローカルに無いファイル名（実は日付の部分だけ）が分かったので、この後はローカルとリモートのマシンから、その日付のデータを集

めてきて整理する（リモートマシン上のデータファイルで、ローカルマシンに取り込みが済んだものは、手動で削除する運用とする）

【shell 記述上の注意】

- \${LINE} と \${match} は、ダブルクオートで囲む必要がある

```
TODAY=$(date +%Y-%m-%d)
match=$(echo "${LINE}" | awk "/^${TODAY}/")
if [ -n "${match}" ]; then
```

- shell の変数名をダブルクオートで囲まないと期待した評価がなされないことがある（シングルクオートで囲むと単なる文字列）
- コマンドとして実行した結果の文字列が必要なら、アクサングラーブ（バッククウォート）でコマンドを囲むか、あるいは\$(command) の形にする（アクサングラーブはシングルクオートと見分けにくい）例えば、次の\$match では TODAY をダブルクオートで囲んでいるが失敗する（TODAY をシングルクオートで囲むと当然失敗する）

```
TODAY="date +%Y-%m-%d"
match=$(echo "${LINE}" | awk "/^${TODAY}/")
```

アクサングラーブで囲むか、\$(command) の形にすると正しく評価される

```
TODAY='date +%Y-%m-%d'
match=$(echo "${LINE}" | awk "/^${TODAY}/")
```

- if 文の -n は、"\${match}" が空でないならばという意味（空ならばは、-z）
マッチした場合は、マッチした文字列が"\${match}" に入ってくる
- ssh で送る前に、予め CMD 変数に \${LINE} と \${DIR} の評価を済ませておく

```
CMD=test\ -e\ ${DIR}/data/${LINE}
RC=$(sshpass -p ${PWRD} ssh ${USR}@${ADDR} ${CMD}; echo $?)
```

- 「test -e ファイル名」は、「test -f ファイル名」でも動くかもしれない
- Python プログラムの標準出力を、while read LINE にパイプで渡している。ファイルから渡すなら、cat FILE_NAME | while read LINE; do (...) < /dev/null; done

```

/home/mat/Documents/lack.sh

#!/bin/bash
TODAY=$(date +%Y-%m-%d)
PASS='mypassword'
USR='mat'
ADDR='192.168.3.27'
DIR='/home/mat/Documents'
cp ${DIR}/w.txt ${DIR}/bkup.txt
source ${DIR}/venv11/bin/activate
python3 ${DIR}/lackdata.py | \
while read LINE; do (
    grep "^${LINE}" ${DIR}/w.txt > ${DIR}"/"${LINE}".wrk
    sshpass -p ${PASS} ssh ${USR}@${ADDR} \
        grep "^${LINE}" ${DIR}/w.txt >> ${DIR}"/"${LINE}".wrk
    CMD=test\ -e\ ${DIR}/data/"${LINE}".txt
    RC=$(sshpass -p ${PASS} ssh ${USR}@${ADDR} ${CMD};echo $?)
    if [ ${RC} -eq 0 ]; then
        sshpass -p ${PASS} ssh ${USR}@${ADDR} \
            grep "^${LINE}" ${DIR}/data/${LINE}.txt >> ${DIR}"/"${LINE}".wrk
    fi
    uniq ${DIR}"/"${LINE}'.wrk > ${DIR}"/"${LINE}'.wrk2
    sort ${DIR}"/"${LINE}'.wrk2 > ${DIR}"/"${LINE}'.wrk
    rm ${DIR}"/"${LINE}'.wrk2
    match=$(echo "${LINE}" | awk "/^${TODAY}/")
    if [ -n "${match}" ]; then
        cp ${DIR}"/"${LINE}'.wrk ${DIR}/w.txt
    else
        cp ${DIR}"/"${LINE}'.wrk ${DIR}/data/"${LINE}'.txt
    fi
    rm ${DIR}"/"${LINE}'.wrk
) < /dev/null; done
deactivate

```

5 新たなシステムへの移行手順

5.1 ローカルマシンの移行

ここまで作成してきたものを、新たなマシン（Raspberry Pi）へ移行する際、必要な手続きについてまとめておく（新しいマシンの OS が導入され、ネットワークの設定を終えた後の手続きになる）

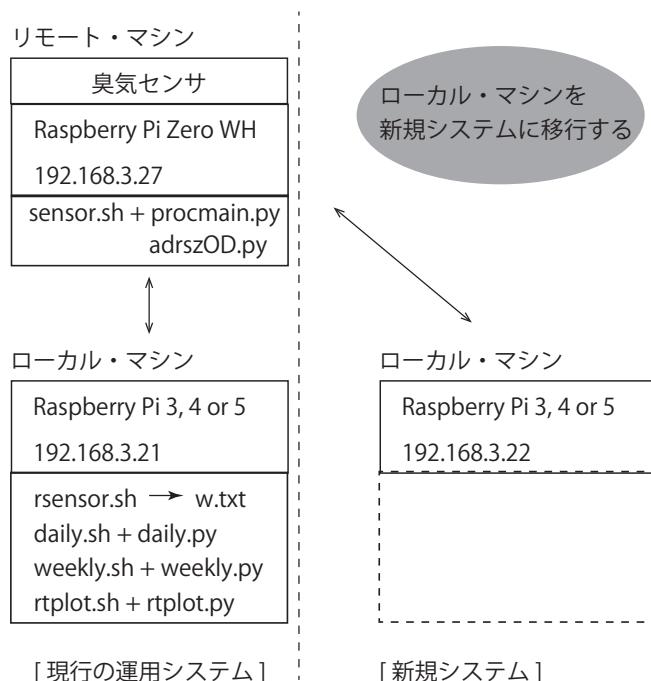


図 8 ローカルマシンの移行

以下の手続きはその都度全て、/home/mat/Documents の直下で実施するものとする

1. ssh を有効にする（Raspberry Pi の configuration で）
2. システムを最新の状態にする

```
sudo apt update
sudo apt dist-upgrade
```

3. sshpass を導入する

```
sudo apt install -y sshpass
```

4. Python の仮想環境を /home/mat/Documents/venv11 につくる⁴

```
python3 -m venv venv11
source venv11/bin/activate
python3 -m pip install -U pip
pip install numpy==1.22.4
pip install scipy
pip install pandas==1.4.2
pip install matplotlib
pip install scikit-learn
pip list -o
deactivate
```

5. data フォルダと figs フォルダを移行する

```
scp -r mat@192.168.3.21:/home/mat/Documents/data ./
scp -r mat@192.168.3.21:/home/mat/Documents/figs ./
```

6. shell と Python のプログラムを移行する

```
scp mat@192.168.3.21:/home/mat/Documents/*.sh ./
scp mat@192.168.3.21:/home/mat/Documents/*.py ./
```

ここで、各 shell には実行可能属性がついている事を確認する ls -l *.sh

もし付いていなかったら付ける chmod +x *.sh

また、リモートマシンの IP アドレス、ユーザ名とそのパスワードが変わった場合は、

ここで rsensor.sh の当該箇所（露に記述している）を編集する

Python のプログラムに実行可能属性は不要である

7. cron に時刻指定手続きを登録する (crontab -e)

```
MAILTO=""
*/5 * * * * sh /home/mat/Documents/rsensor.sh
56 23 * * * sh /home/mat/Documents/daily.sh
1 0 * * Sun sh /home/mat/Documents/weekly.sh
```

⁴ 寺田学 他 3 名、翔泳社「Python によるあたらしいデータ分析の教科書」第 2 版、p.50

8. ssh でリモートマシンに接続を試みて、key fingerprint を登録させる

```
ssh mat@192.168.3.27
The authenticity of host '192.168.3.27' can't be established.
ED25519 key fingerprint is SHA256:.....
This key is not known by any other names.
Are you sure you want to continue connecting (yes/no/[fingerprint])? yes
ssh mat@192.168.3.27 /home/mat/Documents/sensor.sh
```

9. txt ファイルを移行する

```
scp mat@192.168.3.21:/home/mat/Documents/*.txt ./
```

10. rsensor.sh が 5 分ごとに起動され、w.txt を更新している事を確認する

```
tail -f w.txt
```

11. 実時間モニタ用のプログラムを起動する

```
source venv11/bin/activate
python3 ./rtplot.py
```

5.2 リモートマシンの移行

新しいリモートマシンへの移行は次の通り

リモートマシンへの OS の導入とネットワークの設定を終えていること

1. configuration で、ssh と i2c を有効にする
2. 最新の状態に更新する

```
sudo apt update
sudo apt dist-upgrade
```

3. adrszOD.py と procmain.py、及び proc.sh、procdaily.sh を導入する
4. sensor.sh を導入して、実行可能属性を付ける (chmod +x sensor.sh)
5. /home/mat/Documents/sensor.sh を実行して、現在日時とセンサの電圧、それぞれ適切な値が 1 行で出力される事を確認する

6 参考文献

- ビット・トレード・ワン社 zeroone シリーズ拡張基板のサンプルプログラム
(<https://github.com/bit-trade-one/RasPi-Zero-One-Series>)
- BME280 センサーモジュール
(<https://algorithm.joho.info/programming/python/raspberrypi3-bme280-kion-sitsudo-kiatsu/>)
- matplotlib が認識する日付の書式
https://matplotlib.org/stable/api/dates_api.html
- テキストの結合、プロセス置換
Daniel J.Barrett 著、オライリー・ジャパン「Efficient Linux コマンドライン」初版
第 1 刷、p.106 (テキストの結合) , p.154, p.157 のコラム記事
- Python の仮想環境
寺田学 他著、翔泳社「Python によるあたらしいデータ分析の教科書」第 2 版、p.50